



ようにした。登録者は現在スタッフを含め 18 名となっている。

- ・ 野菜の栽培管理の参加者、のべ 50 名以上  
【達成】 のべ 70 名。参加者のお子様、スマイルキッズクラブ様、シュタイナー療育センター森の工房職人様、シュタイナー療育センター星の光園児・保護者様の参加・体験も含む。新たに体験・交流の場として活用いただいた団体や、新たな参加者がいる一方、毎回の作業への参加者は減少している。昨年のはのべ 150 名だったためのべ参加者で見ても半減以上となっている。
- ・ 栽培した野菜を料理し試食する交流会の実施（年 1 回・冬）  
【未達成】 実施できていない。

② シュタイナー療育センター給食に野菜を試験販売する。

《目標》

- ・ 給食で使用できる、品質が良く、規格の揃った野菜の販売  
【達成】 昨年同様、シュタイナー療育センターへの有償での提供を達成した。昨年度行った村立保育園への提供は行わなかった。
- ・ 給食用野菜の栽培品目はタマネギ、ジャガイモ、サツマイモ、夏まきニンジン、秋まきダイコン。  
【達成】

③ 安曇野ちひろ公園おさんぽマルシェ、寄って停まつかわ直売所、大王わさび農園大王マルシェで野菜を試験販売する。

《目標》

- ・ 余剰野菜・規格外野菜の販売  
【達成】 安曇野ちひろ公園おさんぽマルシェ（1 回のみ）、寄って停まつかわ直売所、大王わさび農園大王マルシェでの販売を行った。
- ・ 野菜の販売を通じた松川村の P R  
【未達成】 マルシェ等での販売は昨年より減少し、村外者に P R できたとは言い難い。

【ギャラリー】



## ○所感

村民の要望により、令和元年度のタマネギ植え付けより始まったプロジェクトで、ブラッシュアップを重ね4年度目の実施となりました。今年度は内容の発展より継続を基本とし、昨年度と同様の内容でプロジェクトを運営しました。

非農家を念頭とした村民参加型の農園という部分においては、昨年度までに、親子や障害を持つ方も含めて気軽に参加できる有機農業の体験・交流の場といった雰囲気がつくられてきましたが、今年度も参加者は減ったものの、同様の場として機能したように思います。

有機農業という選択肢の提案という部分においては、昨年度に引き続き、私立保育園への野菜の有償提供を実施しており、スタッフの経験値も増えたため、栽培管理・販売においてはより安定感も増してきたように感じます。今となっては当たり前のことになってきていますが、有機農業が可能な栽培技術を持ちさえすれば、有機農業でも高品質の野菜をつくることはできるし、ニーズが野菜の特徴・品質とマッチすれば、村内でも、有機農業で十分栽培・販売できるという結果が変わらず出ていると思います。

販売活動でも昨年並みの実績となりましたが、村外へのPRは十分できなかったと感じています。

当プロジェクトも4年を経過しましたが、その間農林水産省、長野県も有機農業普及拡大の取り組みにさらに力を入れてきており、そうした流れは今後も加速すると考えます。

有機農業であるかないかに関わらず、人々の健康に寄与する良質な農産物の提供、地球環境負荷の低減、限りある資源の有効利用など、持続可能な農業について考え、肥料や農薬の適正利用やその削減を目指し、そのための重要な手段として、(土耕での栽培においては特に) 土壌微生物の増加・多様化した「土を育てる」こと、未来の子どもたちも利用する農地にそうした「良い土」を残すという認識・行動が農家には必要です。有機農業はそうした農業を実現するためのひとつの手法や指標としてその価値を増しています。

長野県内にも市民(生産者・消費者)と行政が協同して、力強く有機農業の普及拡大に取り組む事例が出てきています。松川村では現在、行政が関係する有機農業に関する取り組みとしては当プロジェクトが唯一となっております。当プロジェクトは小さな取り組みのまま4年目を終えようとしていますが、農家が先述したような課題や認識・行動を再確認し、消費者もともに学び、結果的に有機農業が普及拡大していくきっかけとなり得る事業ではないかと考えますので、今後とも宜しくお願い致します。

有機野菜プロジェクト担当 松川村営農支援センター(地域おこし協力隊) 隈本杜雪